岩手県版中学校道徳資料集

郷土の明日を見据えて

～先人の生き方に学ぶ～

まえがき

皆さんは、これまでにも日本や外国の優れた生き方をした人物の伝記を読んだことがあるでしょう。「アンリー・デュナン」「シュバイツァー」「新渡戸稲造」などでしょうか。人間はだれもが「よりよく生きたい」という願いをもっています。その願いを実現するためには、そのような人物の生き方や考え方を学ぶことがとても大切です。

この資料集「郷土の明日を見据えて～先人の生き方に学ぶ～」は、このような考えをもとに作成したものです。教科書や図書館にある本で知る人物は、自分たちとはちがう世界の人たちであると思う人もいるかもしれませんが、この資料集では、皆さんが、今、生活している同じ岩手県出身の人物の生き方や考え方を扱っています。様々な困難にぶつかりながらも、辛抱強く、あるいは創意工夫をしながら、情熱をもってそれを乗りこえていった姿にふれることにより、今の自分と比較しながら、自分の生き方についての自覚を深めてもらえればと思います。

岩手には、たくさんのすばらしい生き方をした先輩たちがいたのだということを誇りに感じるとともに、自分の「よりよい生き方」のために、同じ岩手の先輩たちの生き方から、たくさんのことを学んでくれることを願っています。

平成二十五年三月

岩手県教育委員会 教育長 菅野洋樹（かんのひろき）

もくじ

まえがき

一　日本一の先生　冨田小一郎……4

二　郷土に産業の灯火を　山奈宗真……8

三　復旧にあらず　復興なり　後藤新平……12

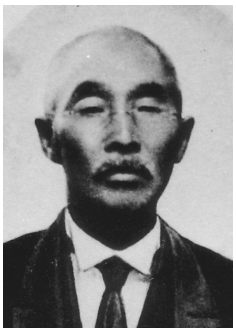
四　だからこの海を　小松藤蔵……16

五　いわての美をさぐる　吉川保正……20

六　村を救った防潮堤　和村幸得……24

日本一の先生

冨田小一郎



（「盛岡市先人記念館」提供）

よく叱る師ありき
髭の似たるより山羊と名づけて
口真似もしき

（※石川啄木　歌集『一握の砂』）より

盛岡中学校（現在、岩手県立盛岡第一高等学校）の冨田小一郎先生と言えば、授業が非常に厳しいので有名だった。当時の数学や英語の試験は英文で作られ、ある年の試験では、三分の一とも半分とも言われる生徒を落第させたのである。小一郎は、こうした厳しい指導について、「一度や二度落第してへこたれるようでは、偉い者にはなれないと信じた結果であった。」と後に振り返っている。

だが、小一郎は、決して厳しいだけの先生ではなかった。

ある年、三年生を担任していた小一郎は、三陸海岸を周遊する修学旅行に出かける。その時の生徒の一人が石川啄木であった。啄木は、その頃から文学に熱中し、勉学をおろそかにしていたため、連日、小一郎に叱られていた。啄木は、修学旅行の宿で、なんとご飯を十一杯もおかわりしたが、いつもは怖い小一郎も、この時ばかりは笑っていたという。

また、当時、印刷所で働きながら学校に通う苦学生であった※田子一民は、授業料や学費に困った時に、小一郎の援助を受けている。かつて小一郎自身も学費に苦労し、一度は大学で学ぶ道をあきらめたことがあった。それでも働きながら苦労を重ねて勉学に励み、教師になったのである。小一郎にとって、目の前の苦学生は若き日の自分自身であった。田子は、後に小一郎について、「『真の

教育家』という文字だけでは、私の先生に対する心は満足されない」と語っている。

学力面も精神面も優れた人物を育てることが、小一郎の教育信条であり、成績が好ましくない生徒がいれば補習授業をし、柔道の稽古に励む生徒がいれば一緒に汗を流した。教え子たちは「慈父」という言葉で小一郎を慕っていた。

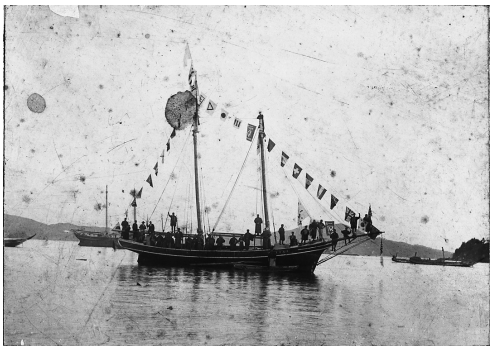
明治三十年（一八九七年）、私立盛岡商業学校が開校された。小一郎は開校当初から、盛岡中学校で先生として教えるかたわら、夜間は商業学校の授業を手伝っていた。そして明治三十二年（一八九九年）ついに校長を引き受けることになった。小一郎は「商業は盛岡市の主要な産業であり、この分野に資する優秀な人物を養成することが大切だ。そのために、商業学校はどうしても必要だ。」と考えていた。

ところが、商業学校の財政はいよいよ苦しくなり、やむなく閉校することになったのである。

「ここであきらめるわけにはいかない。なんとかして学校設立の資金を得たい。」

解決方法を考えていた小一郎は、やがて誰もが驚く方法に出たのである。それは、自ら海岸に移り住んで漁業に従事し、船に乗って漁を行うというものだった。小一郎は、気仙郡末崎村細浦港（現在、大船渡市末崎町）を拠点と定め、家族を呼び寄せた。そして、宮城英語学校時代の後輩である※三田義正を社長にし、自らは常務になり、三立漁業合資会社を設立し、十九トンの「※三立丸」を建造して、意気揚々と大海原へ乗り出したのであった。

盛岡中学校柔道部。中央列右から２人目
（「盛岡市先人記念館」提供）



小一郎が漁に出た三立丸
（「盛岡市先人記念館」提供）

しかし、小一郎の計画は成功しなかった。漁業で学校設立の資金を得るどころか、日々の生活も苦しくなり、妻と三人の子どもを養うためには再就職が必要だった。失意のうちに盛岡へ帰ったが、「米代を払うと銭がなくなる」という小一郎の生涯で最も貧しく厳しい時代となった。それでも、なんとか商業を志す若者の勉学を支えたいとの思いは強く、中学校の校舎の一室を間借りして、昼も夜も彼らを指導し続けた。

やがて、小一郎の願いは現実のものとなった。大正二年（一九一三年）、ついに、盛岡市立商業学校（現在、岩手県立盛岡商業高等学校）が開校され、小一郎は初代校長となったのである。私立盛岡商業学校の校長を引き受けてから、十四年の歳月が流れていた。

小一郎は、続いて女子の商業教育に着手した。当時は、女子が教育を受けることは非常に困難な時代であった。「必ずしも裕福でない家庭の子女にも、より高い教育を受けさせたい。社会的に職業人として自立できる力を与える女子教育が必要だ」という小一郎の女子教育に対する情熱が、私立実践女学校（後の盛岡女子商業学校、現在、盛岡市立高等学校）を誕生させた。

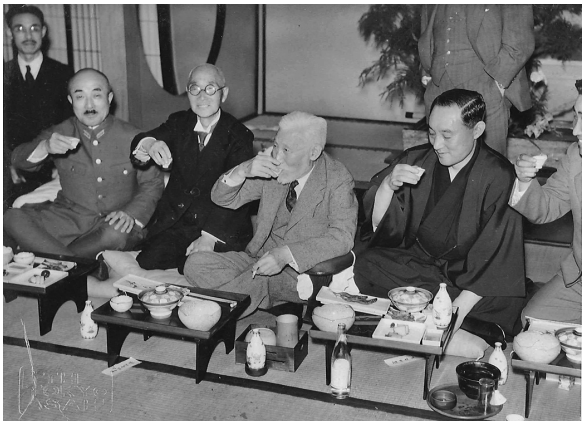
教師陣の多くは、小一郎の理念に賛同した旧知の人物や教え子で、ほとんど無報酬（むほうしゅう）で授業を受け持っていた。小一郎の信条により、授業料は極めて安く、生徒からの寄附も集めず、生徒の就職には小一郎自ら積極的に出向いて世話をした。それに応えるかのように、卒業生は、各企業や官庁で活躍するようになったのである。

「一人でも多くの子弟に教育の場を与えたい。」

小一郎の志と行動力が、二つの学校の創立につながったのである。

昭和十四年（一九三九年）六月三日。東京赤坂の料亭「幸楽」において、盛岡中学校卒業生が中心となって謝恩会を開催した。そこには、海軍大臣　※米内光政、陸軍大臣　※板垣征四郎など、盛岡中学校卒業生を中心に、軍人、政治家、実業家など、およそ五十人が集まり、翌日の新聞各紙は、「日本一の謝恩会」「日本一幸福な先生」といった見出しで大々的に取り上げ、小一郎は一躍時の人となったのである。

教え子の活躍を報道する新聞記事を、一枚一枚丁寧に年月日を記入して写真帳に貼っていたという小一郎にとって、この日はまさに、喜びあふれる幸せな日であったに違いない。



謝恩会写真帳より。前列左から、板垣征四郎、冨田、※田中舘愛橘、米内光政　（「盛岡市先人記念館」提供）

※石川啄木……歌人・詩人。近代短歌史の中で高い評価を得る。

※田子一民……官僚・政治家。第三十四代衆議院議長。

※三田義正……実業家。三田火薬販売所を設立。

※三立丸……三田義正、斎藤源五郎（高田小学校校長を務め、合資会社では水産加工を担当）、冨田の三人の共同出資によることから「三立丸」と名付けた。

※米内光政……海軍軍人・政治家。第三十七代内閣総理大臣。

※板垣征四郎……陸軍軍人。陸軍大臣の後、陸軍大将となる。

※田中舘愛橘……地球物理学者。日本物理学の基礎を築く。その一方で、日本式ローマ字の考案者として知られる。冨田とは、ともに藩校作人舘修文所で学んでいる。

郷土に産業の灯火を

山奈宗真

山奈宗真は、江戸時代末期である弘化四年（一八四七年）、武家の長男として遠野に生まれた。

当時、盛岡藩全体の財政は常に火の車だった。度重なる凶作や災害に加え、ロシア軍艦の来航に備えるために、たくさんのお金が必要だったからである。また、毎年続く不作にもかかわらず、藩が重い税を課したため、大規模な百姓一揆が起こったのもこのころである。多くの農民は、その日の食事にも困っていた。

宗真の父は遠野南部家の※御勝手役をつとめていたが、新しい考え方をもった武士であった。こうした困窮の中で藩の財政を立て直すには、農民を苦しめる増税ではなく、新しい産業である※養蚕や畜産を盛んにして、人々のくらしを豊かにしなければならないと考えていた。

宗真はそんな父から、

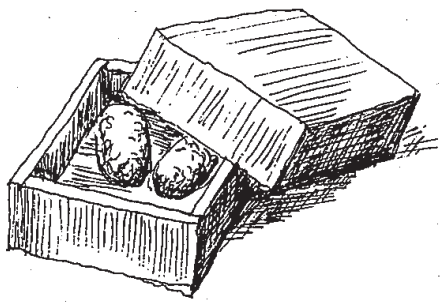
「お前は、産業を学び、農民のために働くことを心がけなさい。」

と言い聞かされて育った。十七歳になった年には、父の熱心な指導を受けながら養蚕に挑戦し、たくさんの繭を生産することに成功した。

このときも、

「ひとつのことを成し遂げるには多くの苦労がある。その苦労があってこそ、成功がある。これからも苦労することを忘れてはいけない。」

と、繭を入れた小箱を父から手渡された。

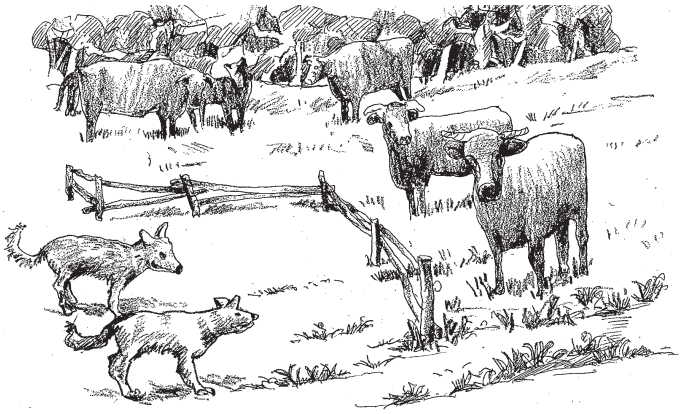


宗真二十一歳の年、時代は江戸から明治へと変わった。宗真はすでに結婚し、父も病気のために江戸時代最後の年に亡くなっていた。しかし、時代が変わっても、農民の困窮は変わることがなかった。むしろ、明治維新によって武士さえ職を失うこととなった。翌明治二年（一八六九年）は、大凶作の年となり、食糧不足はさらに深刻なものとなった。宗真は、飢えに苦しむ浪人や農民を見て、

「このままではいけない。何とかしなければ……。」

と強く思うのだった。

明治三年（一八七〇年）、宗真は一大決心をする。それは「畜産業を学ぶため牧場を開く」というものであった。自ら牧場経営をすることで畜産業を学び、そのやり方を広めて人々のくらしを豊かにしようと考えたのだ。宗真、二十三歳のことである。家族の理解をえて、家屋や財産をすべて売却して資金をつくり、小国村（現在の宮古市川井）白見山麓に牧場を開いた。



ところが、当時、北上高地にはまだ日本狼が棲息していた。放牧した四十二頭のうち、十五頭もの牛や馬が狼の被害にあってしまった。負けてはいられないと、子牛や子馬を生ませ、経営を軌道に乗せようとするが、またまた狼にやられてしまう。ついには、雇っていた牧夫たちが恐れをなし、やめたいと訴えられる事態におちいってしまった。こうして、わずか三年足らずで牧場経営は失敗してしまった。あとに残ったのは、莫大な借金だけであった。

「やはり、私に牧場経営は無理なのか……。」

宗真は、かつて父からもらった小箱をじっと見つめながら考え込んだ。そ

して、ついに、畜産業を学ぶために視察の旅に出ることを決意したのである。借金返済で、残った牛や馬もすべて処分してしまったため資金はなく、自分で旅費を稼ぎながらの苦難の旅であった。愛する妻や子どもは遠野に残し、二年をかけて、北海道から九州まで全国各地へ足を延ばし、畜産業について多くのことを学んだ。

明治八年（一八七五年）、旅を終えて故郷に戻った宗真は、江繋村（現在の宮古市江繋）で牧場を再開した。しかし、村との共同経営であったことや、※副戸長をつとめたり、生活のために測量の仕事をうけ負ったりしていたため、自分が思うような経営ができなかった。そこで、宗真は思い切って安定した生活を捨て、副戸長も辞めて、土渕村（現在の遠野市土淵）に個人経営の立丸牧場を開き、その経営に専念することにした。

さらに、宗真は、畜産業の普及のためには牧場を拡張しなければならないと思案し、ときの県令（県知事）、島惟精に面会し、牛の※貸与を申し出た。

「遠野地方にはこれといった産業がなく、人々は生活に困っております。これらの人々を救うには、新たな産業としての畜産業を広めていく必要があります。そのために、今の牧場経営を発展させていかなければなりません。どうか県から牛を貸してください。」

島は、宗真の目をまっすぐ見つめて尋ねた。

「資金はいくら位あるのか。」

宗真は、胸を張って答えた。

「資金はまったくありません。しかし、私には志を同じにする家族がいま

す。家族が一致協力して働く力こそ、何万の資金に勝ると信じております。」

島は、はじめ驚きの表情であったが、やがて、その思いに感激し、牛十五頭を貸してくれることとなった。これをきっかけに、毎年県から多くの牛を借りることができるようになり、やがて牧場経営は軌道に乗っていった。さらに、明治十五年（一八八二年）には附馬牛村（現在の遠野市附馬牛）に、夫婦で六十日間も山ごもりして大野牧場を開いた。こうして、宗真は「※ベコの宗真」と呼ばれるようになり、畜産業の第一人者として道を歩むこととなった。

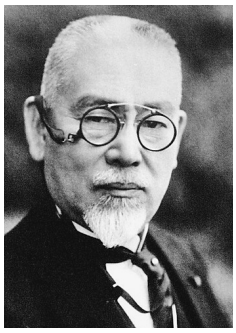
宗真は、畜産業ばかりでなく、産業を学ぶきっかけとなった養蚕や、ブドウ、ホップ、キャベツ、トマトといった当時としては珍しい商品作物の栽培や、植林にも取り組んだ。それぱかりではない。産業振興に取り組む中で教育の重要性を痛感し、日本で初めての※私立図書館も開設した。これら数多くの事業は、その後の郷土発展の礎となった。まさに、宗真は、遠野、そして岩手の産業振興の※先駆者となったのである。

このように、宗真の生涯は、郷土に産業の火を灯したいという信念に貫かれた人生であった。

※御勝手役……当時の役職名で、今の会計担当にあたる。
※養蚕……蚕を卵から育てて繭をとること。繭は絹の原料となる。絹は当時、貴重な織物であった。
※牧夫……牧場で牛や馬の世話をする人。
※副戸長……明治初期に町村に置かれた役職。町村の代表という性格をもった。
※貸与……貸し与えること。ここでは、岩手県から牛や馬を借りることをさす。
※ベコ……「牛」のことをさす方言。
※私立図書館……「信成書籍館」という。私財を投げ打って書籍を購入して備え、希望する一般の人々の閲覧に供した。
※先駆者……人に先がけて物事をなす人。

復旧にあらず　復興なり

後藤新平



大正十二年（一九二三年）九月一日、午前十一時五十八分、関東地方に大地震が発生した。世に言う関東大震災である。地震後に発生した火災で、東京と横浜では市街地の大半が消失し、特に東京においては、都心部と下町のほぼ全域が焼土と化した。死者・行方不明者は、十万人に達する大災害であった。

このような大災害から、大胆な計画で東京を復興に導いたのが、岩手県出身の後藤新平である。

後藤新平は、安政四年（一八五七年）、陸奥国胆沢郡塩釜村（現在の奥州市）に生まれた。幼少より学識が高いことで知られ、十三歳になると、のちに内閣総理大臣となる同郷の斎藤実とともに、胆沢県庁に職員として抜擢されるほどであった。十八歳になった新平は、医者を志して福島の医学校に入学し、二十五歳には愛知県で医学校長兼病院長となった。その後、国の機関である内務省衛生局に採用されると、

「社会は、人と人とのつながりが人体のように機能することで発展する。国家は、人の生命を衛（守る）ようにしなければならない。」

と述べ、今度は政治の面から国民の安全を衛（守る）ため、強い意志と実行力で日夜奔走した。新

大震災により焦土となった東京
（「後藤新平記念館」提供）

平は、「国家を治す医者」を目指したのである。

そんな新平が、内務大臣（警察や土木等の担当）兼帝都復興院総裁に就任したのは、大正十二年（一九二三年）九月二日、大震災の翌日である。

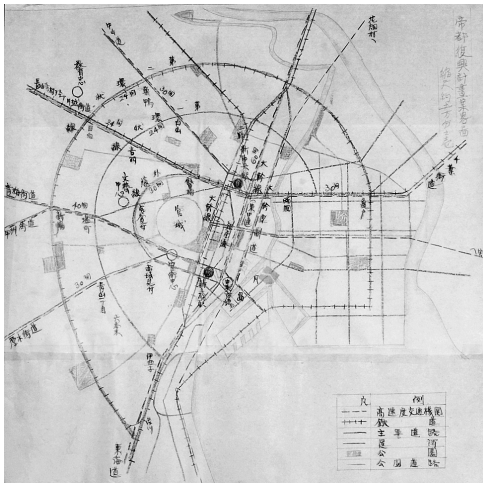
「自分がやるべきことは何なのだろうか。」

目の前に広がるのは、焼け野原と化した首都東京の姿であった。人々は住む場所はもちろん、着替えもなく、食料さえなかった。しかし、新平は、その悲惨な状況に立ち止まることなく、震災復興計画の立案に着手した。新平と復興計画を推進するチームは、一日の睡眠時間約三時間という中で、調査、検討を繰り返した。そして、震災からわずか三か月という速さで完成させた『東京復興の議』として発表された復興案の概要は、次のようなものであった。

> ※遷都はせず、東京に復興費三十億円をかけて、欧米のような広い道路や公園を備える最新計画を適用した首都を再建する。その都市計画のために焼土を地主から買い上げる。

しかし、※審議会では、新平の考えた案に賛成する者はほとんどいなかった。審議会の委員からは、「国家の財政が苦しいときに、このような巨額の予算を計上するのは暴挙である。」という発言に始まり、「※大風呂敷」と批判も受けた。そして、「計画の縮小」や「新道路計画の放棄」が声高に叫ばれた。多くの地主からも、土地を収用されるということで強い反対運動が起こった。それでも新平は、このような批判に対し、

「復旧にあらず、復興なり」



手書きの計画図
（「後藤新平記念館」提供）

と主張した。首都東京を単に震災前の姿に戻す「復旧」ではなく、都市機能を拡充し、このような大震災から人の生命を衛（守る）ことができるような都市として「復興」させることの重要性を訴えたのである。

結局、「復興」の考え方は理解されず、ついには反対派の力によって復興院の事務費をゼロにされ、「復興計画」の大幅な修正をも余儀なくされる事態となった。

復興の計画さえ進まないこの状況を知った親友のビアード※教授は、

「世界は新平に注目している。この計画を死守しなければ、十年ないし五十年後に再び起こるかもしれない第二の危機は、さらに被害が広く、大災害を誘発する。人命財産を防衛するのに足りないような小さな計画を立てるのは、愚かな行為である。案が通らないなら辞職すべきだ。」

という手紙を新平に送った。

この手紙を読んだ部下は、新平に対して涙を流しながら口々に叫んだ。

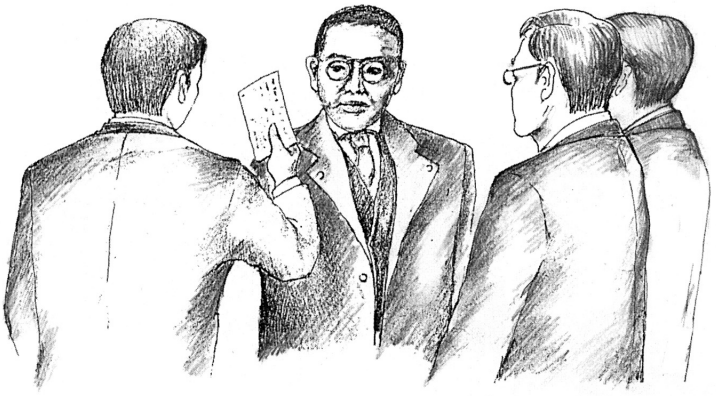
「この手紙を読みましたか。計画通りに復興を断行しましょう！」

「反対派となぜもっと闘わないのですか。この計画を通さなければ、世間から後藤、破れたり！と言われてしまいます。」

新平は静かに、そして一つ一つの言葉をかみしめるように言った。

「自分の政治家としての面目や地位などはどうでもよい。今、自分が反対派と闘って辞職したらどうなる。東京の復興はさらに遅れるばかりではないか。」

こうして、いつもであれば感情的になり、自分の意見を通す新平であったが、復興予算の削減や計画の修正を受け入れることを決断した。これからの東京の本当の意味での復興を考えると、新平



は、これを最善だと判断したのだった。

大正十二年（一九二三年）十二月、震災からわずか四か月足らずで本格的な復興事業が開始された。復興計画は大幅に縮小されたものの、長年の東京の課題であった都市改造を実現した。避難場所ともなり得る広い隅田公園、広い道幅によって火災の延焼を防ぐことができる昭和通り、地震に強い鉄筋コンクリートでつくられた小学校や橋など、「衛生と防災」に配慮した街が、ついに完成したのである。

昭和五年（一九三〇年）三月二十六日、復興完成式典が開かれた。しかし、そこには新平の姿はなかった。復興の完成を待たずして式典の前年に死去したのである。

現在、東京は世界都市とも言われ、人口が千二百五十万人を超えている。そこに見られる幹線道路網の大きな部分は新平の計画によって造られたものである。今の東京の発展は、新平の復興計画の上に成り立っているのである。

復興後の江戸橋付近の昭和通り
（「後藤新平記念館」提供）

※遷都……首都を他所へ移すこと。
※復興費三十億円……当時の国家予算の二倍の額であった。
※審議会……議会で決定する前の段階の会議のこと。
※大風呂敷……常識的に見てとうてい実現不可能と思えるような大計画を立てて、人々に吹聴すること。
※ビアード教授……アメリカ人で元コロンビア大教授。後藤新平が東京市長（知事）の時に来日してアドバイスを送った人物。

だからこの海を

小松藤蔵

大船渡市にある景勝地、『碁石浜』を見渡す一角には、わかめ養殖漁業の先駆者であり、人生の大半を郷土の海の発展に尽くした小松藤蔵の業績を讃える二つの碑が建てられている。藤蔵が最初にわかめ養殖を始めた漁場を一望できるということで、平成十九年（二〇〇七年）に地域住民が記念碑と顕彰碑の二碑を建立したのであった。

それから四年後の平成二十三年（二〇一一年）三月十一日、東日本大震災津波が発生し、岩手県内の水産業は壊滅的な被害を受けた。多くの人々が途方に暮れていたが、漁業関係者は一致結束して立ち上がり、復興再建を目指し、わかめの養殖に希望を託した。晩秋に種をまけば、豊かな海の恵みを受けて、翌年の早春には収穫ができるのだ。海にはかつてのように養殖の浮き玉が力強く浮かんだ。

そして、待ちに待った翌年三月、復興の光ともいえるわかめが収穫された。藤蔵が生涯をかけて郷土に残したわかめ養殖の技術が、今回も生かされたのである。

碁石浜の一角に建つわかめ養殖発祥の記念碑と顕彰碑

第二次世界大戦後、漁村の人々の生活は貧しいものであった。漁民たちは、年によって出来不出来があり生産が安定しない天然の海産物に、その家計の大部分を頼っていた。特にも、天然のわかめが採れる磯は限られたものであり、漁民たちは手漕ぎ船で磯場に行き、冷たい海水に長時間浸かりながら、海底に生えているわかめを鎌で刈り取るといった重労働をしいられていた。

兵役の後、出身地である気仙郡末崎村（現大船渡市末崎町）に戻り、海苔の養殖等の漁業を営んでいた藤蔵は、目の前に広がる青々とした海原と、精一杯働く漁民たちの姿を黙って見つめていた。

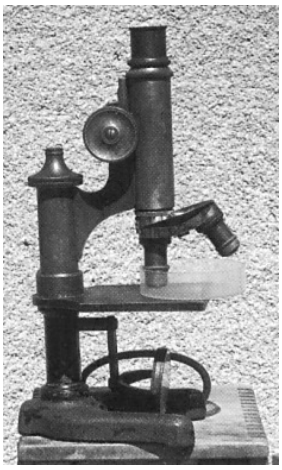
「安定しない天然わかめをあてにするより、わかめも養殖によって、良質なものを大量に生産できるようになるはずである。浜の暮らしも必ずや良くなるに違いない。」

このように考えた藤蔵は、昭和二十八年（一九五三年）、貧しい漁民の生活の改善に向け、私財を投じて、天然わかめから人工的にわかめの※種苗を生産する研究に着手した。このとき、藤蔵は三十七歳であった。すでに外洋における海苔の養殖を成功させており、その技術と方法については自信があったことも藤蔵を後押ししていた。

しかし、当時の養殖に関わる資材は今から考えると非常に粗末な物であり、必要な道具は自作しなければならなかった。藤蔵は何もかも手探りの中、わら縄を※コールタールで染めて養殖の縄を作るなど、様々な工夫を重ねた。また、わかめの胞子などを観察し、多くのデータを地道に集めた。その観察には顕微鏡が必要であったが、なかなか手に入れることができなかったので、隣町にあった水産試験場まで足しげく通い、顕微鏡を見つめ続けた。

周りの漁師は、そのような藤蔵を初めは変なものでも見るような目で眺めていたが、少しずつ成果が上がってくると、一人また一人と藤蔵に協力する者が増えていった。数々の失敗を伴いながらも、郷土の海に一途な思いをもって研究し続ける藤蔵の姿は、周りの人々の心をつかんでいくのであった。

そのような試行錯誤の末、藤蔵は、ようやくわかめ養殖技術の研究を確立したが、その成功に留まることなく、すぐさま次の段階に取り


藤蔵が使用したドイツ製の高価な顕微鏡

組んでいった。

「個人個人が養殖に精を出しても限界がある。わかめ養殖を企業化させることに成功すれば、我が郷土の海は人々に様々な恩恵を与え、浜の生活はさらに安定したものとなるであろう。漁民みんなが豊かに、そして、幸せにこの地で暮らすことが出来ればよい。」※

そう考えた藤蔵は、企業化することの意義を漁業関係者たちに伝えるために勉強会を開催し、理解を得ることに力を尽くした。説得は困難でまた時間を要することとなったが、わかめ養殖の将来性に着目した漁民たちが徐々に賛同（さんどう）したことによって、念願の企業化が現実のものに近づいていった。

研究に着手してから四年の年月が流れた昭和三十二年（一九五七年）、藤蔵は、ついに「つくり育てる」養殖技術と体制を生み出した。感情をあまり表に出さない藤蔵も、このときは研究や活動をしてきた仲間とともに、どんどん込み上げてくる思いを胸に喜び合ったという。

藤蔵が生み出したわかめ養殖の基盤は、こうしてやっと漁民に根付くことになり、安定的なわかめ生産と漁民の重労働の解消が実現し、水産業の発展につながっていくことになるのである。

しかし、無難にいきそうな養殖わかめも、自然災害から逃れることはできなかった。台風や大波など、日常よく起こる自然災害でもわかめが施設から落とされ、ロープだけ残るといった困難も度々であった。特に甚大な被害を受けたのは、昭和三十五年（一九六〇年）に起きたチリ地震津波によるものであった。養殖施設は跡形もなく流されてしまい、藤蔵や漁民たちは、その被害の大きさにぼうぜんとするしかなかった。それでも藤蔵をはじめとする人々は、様々な被害にめげることなく、そのつど養殖施設の修復、改良に取り組んだ。苦労の連続ではあったが、藤蔵たちの郷土の海に対

する思いは、ますます熱いものとなっていったのである。

藤蔵は、困難なことがあると「人の血の成分は海の成分と同じ。だからこの海を大切にしなければならないのだ。」と周囲によく語っていたという。

藤蔵が築いたわかめ養殖技術は、県内各地の漁業関係者が受け継ぎ、さらに改良、発展させ、生産量は増大していくこととなる。藤蔵自身は、水産業界の要職を数多く歴任したが、立場が変わっても、漁業の発展に貢献し、郷土の海に対する思いを生涯絶やすことはなかった。

今日、岩手県は日本一のわかめ生産地として、全国に名が知られるようになった。国内のわかめ生産のおよそ四割を岩手県産が占めており、郷土の海とともに生きる沿岸漁民の重要な生産部門として、その生活を支えている。

ひたすら漁民とともに苦しみや喜びを分かち合い、自分のことよりもまず、郷土やそこに住む人々に奉仕した藤蔵。その分身でもある碑は、今日も豊かな海原を静かにじっと見つめている。

※種苗……わかめの胞子を細い糸に付着させ葉体が数センチメートルになるまで成長させたもの。これを養殖ロープに巻き付けると、約三か月後にわかめが収穫できる。

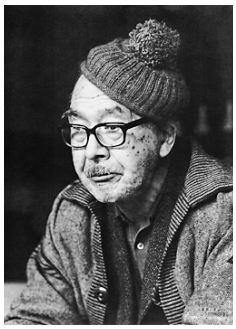
※コールタール……石炭を蒸留したときに生成する茶褐色（ちゃかっしょく）または黒色の粘りけのある液状物質。

※企業化……複数の漁民が生産手段等を共有し、漁業経営、販売を共同で行うこと。

小松藤蔵の顕彰碑

いわての美をさぐる

吉川保正



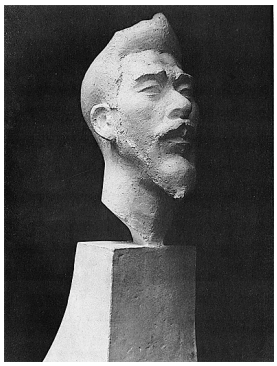
チャグチャグ馬コの手綱引きや観光バスガイドの装いとして、今でもよく目にする雫石あねこ姿。野良着であったこの装束をはじめ、郷土の無名の職人による※民芸の美を発掘し世に紹介したのが、岩手出身の彫刻家である吉川保正でした。

雫石あねこ

「テイテントレタ　イワマニモツタエテクレ」

保正は、大正一〇年の帝展（政府主催展覧会）で念願の入選を果たし、郷里の姉に電報を送りました。イワマとは保正の養母です。明治二十六年、重茂村（現宮古市）に生まれた保正は、幼い頃に明治三陸大津波で母を亡くし、その数年後には父も他界していました。

二十歳の春に彼は、「絵描きなんぞまともな人間がなるものではない」という周囲の声を押し切って上京し、東京美術学校（現東京芸術大学）で近代彫刻を学びました。西洋の彫刻が作家個人の自由な表現として、ようやく認められるようになってきた時代でした。彼は、ひたすら対象を見つめ、自己に向き合い、新しい美を求めて制作に励みました。そして、二十八歳にしてついに彫刻家として世に認められたのです。翌年に発表した「自刻像」は、その技量と作品の精神性が評価されて文部省買上げ第一席となり、彼は彫刻家としての名声を確かなものにしたのでした。



自刻像（1922年）

それから保正は、中国雲南省の美術専門学校の教授として大陸に渡り、地域の美術調査にも従事

しました。そして二年後に帰国し、商工館（現岩手県工業技術センター）の商工技手として、郷里岩手に迎え入れられたのでした。

彫刻家として成功し岩手に戻った保正は、この頃、柳宗悦（※やなぎむねよし）が提唱した『民芸運動』に出会います。柳は、無名の職人による民衆的美術工芸の美を発掘し、世に紹介しようとしていました。

「民芸の手仕事の価値は、有名無名を問わずただその品物にある。作り手はその名をとどめずこの世を去っていくが、親切にこしらえた品物の中に、彼らがこの世に生きていた意味が宿る。」

この言葉に出会ったとき、保正は、はっとさせられました。それは、独創性を追求し名を成そうとする作家的作風の対極にある、「無心の美」とでも言うべき考え方です。西洋美術を学び、作家として作品を世に問う道を歩んできた彼は、驚きの念を禁じ得ませんでした。

「民芸には本当に価値があるのか、論より証拠となる品をこの眼（め）で確かめなければならない。」

彼はそんな強い思いにかき立てられ、県内各地にどんなものがあるのか訪ね歩くことにしたのでした。

しかし、そう易々とその答えは見つかりません。近代化の波は中央から遠いみちのく岩手にも及び、日用品の多くは手作りのものから機械製のものに取って代わられつつありました。これまで使い慣らしたものへの愛着はおろか、日々の暮らしから手仕事の価値が忘れ去られようとしていたのです。伝統の塗り物を求めて老舗（しにせ）の漆器（しっき）屋を訪ねても、

「古くさい時代もののお椀（わん）なんぞ、もう川に流して捨ててしまった。」

民芸品を調査する保正

と言われる始末でした。それでも保正は茅葺屋根の古民家や古い寺を訪ね歩き、屋敷の奥にしまい込まれていた衣服や食器、仕事のための用具などをくまなく見て回りました。

そんな彼が、県南地方を訪れたときのことです。江戸時代より前に作られたというお椀を手に取りじっと見つめた保正は、その古びたお椀から、最近の売り物にはない、真面目で力強い気風が伝わってくるのを感じました。それは『秀衡椀』と言い伝えられているものでした。いつ、どこで作られたものであるかは知る由もありません。しかし、奥州藤原氏の時代に端を発すると思われるその技が、歴史の変遷と興亡を乗り越え受け継がれてきたことは確かです。どっしりと安定した形。たっぷりと塗り重ねられた漆。源氏雲に菱紋と松竹梅などの吉祥文様。一族の繁栄を願い丹精込めてつくられ、長年大事に使われてきたこの椀に、保正は、人々の暮らしに根ざした深く豊かな美しさを見たのでした。

それからの保正は、伝統工芸と言われるものばかりでなく、庶民が農耕生活の中で使ってきた装束や道具にも目を向けるようになりました。それは、自然を相手にした仕事と暮らしにはどこか正直で健康なものがあり、そこで作られ使われ続けているものには、真面目で念入りな手仕事の性質が宿るに違いないと思ったからでした。

実際、保正は、遠野や九戸、雫石の「みの」、「けら」と言われるものに目を奪われました。これは、古来からある外套、あるいは羽織にあたるものです。その地域でとれる材料を生かし、使う人の身を守るため厚く念入りに編まれています。特に手の

遠野市小友地方のまだけら

松・笹模様の秀衡椀

込んだ首元の編み込み文様には魔よけの意味もあり、雨や雪をしのいで無事に帰ってくるように祈りを込めて作られたものです。彼はそこに、

「手仕事の背後にはいつも、責任と思いやりが控えている。」

という民芸の本質を見たのでした。

このような手仕事は、自然の恵みと先祖から伝わる知恵や経験に支えられ、その技に人々の願いが刷り込まれ、その土地固有の伝統となっていったものです。それ故保正は、民芸に個人を越えた郷土の文化の価値を確信するようになりました。彼は言います。

「民芸に限らず、我々は岩手の先人が築いたいろいろな文化、あるいは文化感情を大事にしなければならないと思う。中央文化の導入も大切には違いないが、岩手という風土から生まれた文化を守り、生み出していかなければ、岩手はいつまでたっても後進県というレッテルをはずすことは出来ないだろう。」

吉川保正著書「美をさぐる」

生涯「美」をさぐり続けた吉川保正は、絵、彫刻、民芸と次第にその仕事の領域を広げ、その半生を仏像、面、郷土芸能、宗教など多岐にわたる研究に捧げました。中でも、彼が探し出した岩手の民芸の手仕事は、岩手の風土が育んだ先人たちの心の仕事であったことを教えてくれます。岩手の文化に誇りをもち、その価値を見直していくことの必要性を説いたその精神は、今でも多くの人々に受け継がれています。

※民芸……日常的に使われる工芸品のこと。
※柳　宗悦……美術評論家・宗教哲学者。民芸運動の提唱者として知られる。朝鮮で「三・一独立運動」が起こったとき、その運動に共感し、日本の朝鮮に対する植民地政策を批判した。

村を救った防潮堤

和村幸得

平成二十三年（二〇一一年）三月十一日、普代村は東日本大震災津波に襲われた。漁港や漁業関係施設は壊滅的な被害を受けた。しかし、死者・行方不明者はほとんどなく、家屋にも被害はなかった。村は防潮堤と水門に守られたのである。震災時、必死で水門のゲートを閉めた村の消防士は、後にしみじみと語った。

「水門の高さがもう少し低かったら、村にはものすごい被害が出ていただろう。もちろん私の命もなかった。」

津波は水門に衝突して乗り越え、水門脇の山肌を切り崩したものの、水門近くの普代小学校の前で止まった。過去に津波の被害が大きかった太田名部地区も、防潮堤が津波を食い止め被害はなかった。村民の命と家屋を守った防潮堤と水門、その高さは十五・五メートル。完成まで導いたのは、元村長　和村幸得である。

村長になった和村には、忘れられない出来事があった。

昭和八年（一九三三年）三月三日、午前三時頃。和村はかつて経験したことのない強震に目を覚ました。三十分位すると、沖の方から「ゴォー」という音がしたので、取るものも取らず裏山にかけ登った。振り返って見ると、普代の街は波で一面真っ白になっていた。恐ろしさと寒さに身を縮めながら一夜を過ごした。夜が明け、一番被害が心配されていた太田名部地区に向かった。険しい峠を越え地区が見えるところまで行くと、和村は目を疑った。かつて密集して建てられていた家屋

は一軒も残っていなかった。積もった土砂の中から、家族や友人を探す姿があちこちに見られた。

「※阿鼻叫喚とはこのことか。」

和村は、言葉も出なかった。これが、昭和三陸津波である。

村は過去にも大きな津波に襲われていた。明治二十九年（一八九六年）の明治三陸津波の際には、千人を越える死者・行方不明者を出し、流出倒壊家屋も二百五十八戸を数えるなど壊滅的な被害であった。大きな災害の前に、家屋をはじめ、働くための大事な漁業施設や道具、そして、多くの尊い命までもが失われたのであった。

「二度あることは、三度あってはならない。」

和村は、津波から村民の命と家屋を守ることを心に誓った。

まず、津波研究所や先進地に出向き、普代村の地形や海岸に合うような津波被害を防ぐ方法は何かを研究をした。その研究成果が、太田名部地区への防潮堤と普代川への水門の建築であった。それには多額の費用がかかることから、県や国からの支援を受けることが必要であった。そこで、県の土木部に陳情を重ね、建設省にも粘り強く働きかけた。また、建築予定場所は国立公園の指定や河川の規制があり、その解除にも尽力した。

その結果、とうとう念願の建築計画が動き出した。和村は一緒に奔走してくれた村職員と、手を取り合って喜んだ。

昭和三陸津波後の太田名部部落の津波災害状況

しかし、喜びは一瞬にして落胆に変わった。県から示された防潮堤の高さは十四メートルであったのである。

「何が何でも、十五メートル以上でなければならない。」

と、和村は心の中で叫んだ。明治の津波の高さは十五メートルであると、村では言い伝えられてきたからである。だがここで、高さを変えてくれと主張すると、せっかく動き出した計画が中止になるかもしれない。

さらには、村議会の中からも、

「そんなに高くする必要はあるのか。」

「津波なんか、本当にくるのか。」

などの反対意見が出てきた。村民の中からも、

「その建築資金を他のことに使えばいい。」

「建築のために土地を譲(ゆず)れだと。先祖代々の土地は譲れない。」

などの反対の声が次々とあがった。動き出した建築計画は大きな壁にぶつかった。

和村は、その必要性を理解してもらうために、あらゆる努力を続けた。

まず、高さを十五メートル以上とするように、県などに繰り返し働きかけた。次に、村議会へ事業の意義を説明し続けた。村民へも直接説明を繰り返した。さらに、土地を譲ってくれない村民に対しても、和村や村の職員は何度も足を運び、碁を打ったり世間話をしたりする中で、防潮堤建築の必要性を必死に説いた。それでも、全ての村民の理解を得ることはできなかった。

「これだけ説明してもだめなのか。防潮堤建築はあきらめた方がよいのだろうか…。」

美しい普代の自然と街を眺めながら、和村は悩んだ。そのとき、和村の脳裏に、昭和三陸津波の際に見たあの光景が浮かんだ。

「やはり防潮堤は絶対に必要なんだ。建築推進だ。」

こうして、和村は、建築に必要な行政手続きを推し進めることを決断する。そして、ついに、県からの建築許可を得たのである。

昭和四十二年（一九六七年）、太田名部地区に防潮堤が、昭和五十九年（一九八四年）には、普代地区に普代水門が完成した。その高さは、和村が一貫して主張してきた十五メートルを超える、「十五・五メートル」であった。

四十年間務めた村長を退任する際、次のような言葉を残している。

「村民のためと確信をもって始めた仕事は、反対があっても説得してやり遂(と)げてください。最後には理解してもらえる。これが私の置き土産です。」

東日本大震災津波から半年後の九月。普代の秋祭りは、規模こそ縮小したが、にぎやかに行われた。祭りの笛の音は、幾多の試練を経ながらも、村民のことを第一に考え事業を推進した和村村長に、感謝の気持ちを伝えているようであった。そして、和村が静かに眠る墓には、その功績をしのび、村民をはじめ多くの人々が訪れ、美しい花が絶えることなく手向(たむ)けられている。

※阿鼻叫喚……悲惨な状況におちいり、混乱して泣き叫ぶこと。

この資料集の編集にあたった先生方（順不同）

◇道徳資料集作成委員

及川　公子（盛岡市教育委員会　指導主事）
菊池　　勉（奥州市教育委員会　指導主事）
田畑　周哉（沿岸南部教育事務所　指導主事）
佐藤　智一（宮古教育事務所　主任指導主事）
向折戸　博昭（県北教育事務所　主任指導主事）
長根　義広（県立総合教育センター　研修指導主事）

◇道徳資料集協力委員

稲垣　キツ子（盛岡大学文学部児童教育学科　非常勤講師）
川守田　　毅（区界高原少年自然の家　社会教育指導員）
尾澤　厚子（奥州市立白鳥小学校　校長）

◇表紙、本文中イラスト

齊藤　眞理子（久慈市立夏井中学校　校長）

◇題　字

藤岡　宏章（野田村立野田中学校　校長）

◇事務局

小菅　正晴（岩手県教育委員会事務局学校教育室　首席指導主事兼義務教育課長）
飯岡　竜太郎（岩手県教育委員会事務局学校教育室　主任指導主事）
森本　晋也（岩手県教育委員会事務局学校教育室　指導主事）
水城　久美子（岩手県教育委員会事務局学校教育室　主事）